

令和3年8月19日

宮崎県柔道整復師会
奈須 開生会長

高鍋支部
比江島 崇

東京2020 カヌースラローム競技医療救護活動報告

- 1 活動期間 令和3年7月25日(日)～7月30日(金)
- 2 活動時間 7時30分～17時30分
- 3 活動場所 葛西カヌースラロームセンター
(東京都江戸川区臨海町6丁目1番1号)
- 4 活動内容 ○選手・監督・コーチなどのチーム関係者、オリンピックファミリーの医療・救護活動
※メディア関係者は観客対応医務室が対応
※受診時は健康保険適応

時間	活動内容
7:30	集合
8:00～10:00	ミーティング 救護シュミレーション(約90分)
10:00～11:30	コースデモンストレーション用救護活動
11:30～12:30	昼食休憩
12:30～17:00	競技救護活動
17:00～17:30	片付け
21:00～21:30	ミーティング(リモートによる)

○救護シュミレーション

- ・スクープストレッチャー、車いすを用いた搬送訓練
- ・様々な症例を想定し、数パターンで訓練

○活動体勢

- ・ドクター：3名 ナース：2名 PT：2名 ACA：4名
- ・スタッフはFOP(フィールド・オブ・プレー)を2班、医務室を1班の三体制に分ける。
 - ① FOPA(ドクター：1名 PT/ACA：3名)
 - ② FOPB(ドクター：1名 PT/ACA：2名)
 - ③ 医務室(ドクター：1名 ナース：2名 PT：1名)

ドクターは30分ごと、PT/ACAは1時間ごとに順繰りで配置。

○医務室対応案件

- (1)コースデモンストレーターがコースチェック中に熱中症と思われる症状。
- (2)選手がプレスへのインタビュー中に熱中症と思われる症状で倒れる。

(1)(2)とも救急搬送には至らず。

(3)持病で頭痛の選手が、頭痛薬の処方求めた。

(4)練習時の切創で絆創膏を求めた。

重大な負傷による案件はなし。

5 所感

カヌースラロームセンターの医療班は、医師の坂井田先生をリーダーとし、滋賀県のコンディショニング部門メンバーが主体のほとんどが関西圏の人材であった。2019年に行われたプレ大会、そして本大会を通じて、国際基準の競技での安全管理可能なカヌーメディカル部門を作ることが今回の目的でもあった。

今後、日本でカヌースラロームの国際大会が行われた場合は、今回の医療班のメンバーで対応していきたいとのことで、このようなメンバーに参加できたことは、すごくうれしい。

カヌースラロームでの重大な負傷案件は、肩関節脱臼、カヌーが転覆した際、溺れることだが、一流のオリンピック選手にそのような者はいなく、さすがとの思いであった。

コロナ禍で感染者が急増していたこともあり、毎日のPCR検査、手指消毒、ゴム手袋の使用、選手搬送時にはN95マスクの使用が義務付けられ、過信してはいけないが、感染症対策は徹底されていたと思う。パンデミック下でのイベント実行は予想以上に大変そうで、オリンピック組織委員会がかなりの対応に追われていた。

また、医務室で医師の指示の下、手技療法、テーピング等を施せるのは、PTとマッサージ師のみである。柔整師、鍼灸師はACA（アスリート・ケア・アシスタント）と分類され、医務室での医療行為はできない。国際大会での柔整師・鍼灸師の知名度はまだまだのようである。これからも今大会で少しずつ行ったように、柔整師・鍼灸師も優れた手技・テーピング等の技術があることをアピールしていくことが急務であると考ええる。

そして、医師・PTとの間で、柔整師・鍼灸師が医療情報の理解・共有ができるような環境を整え、機械を与えることも必要だと考える。

